

ジンジャーの贈りもの



絵・文 こそかまゆみ

ジンジャーの悩み

ある街のはじっこに、ネコとなかよく暮らしている家族がありました。

4人家族の末の男の子は、ネコのジンジャーが大好きで、ジンジャーもまたこの“いちばん小さなご主人さま”が大好きでした。

ある朝、ジンジャーはとても早く目をさまし、こんなことを考えました。

「どうしたらいちばんちいさなご主人さまによるこんでもらえるかしら？」
いつもやさしいご主人さまにジンジャーはお礼がしたかったのです。



冒険のはじまり

でも、いちばん小さなお主人さまは、歌をうたってもよろこびません。上手につかまえたねずみもうれしくはないようです。

困ったジンジャーは鳥かごの中に向かってたずねました。

「ねえ、鳥さん、どうしたらいちばん小さなお主人さまがよろこぶか知ってる？知ってたら教えてよ。僕、一度でいいからお礼がしたいんだ！」



ぼくにはないよ！

オカメインコは笑って応えました。

「どうしたらいいかですって？簡単よ。わたしのよう美しくさえするの。そうすれば、いちばん小さなご主人さまはうっとりしてよろこんでくれるわ！」

ジンジャーは悲しそうにうなだれました。だってジンジャーは鳥のような美しい声を持っていなかったんですもの。

ジンジャーは泣きながら外に出て行きました。

ジンジャーにとって、はじめての外の世界でした。飼い猫のジンジャーは、家族のいる家の窓から外を眺めることはあっても、自分の脚で街を歩いたことはなかったのです。



走る 走る

はじめて見る物におどろきながら、ジンジャーは元気よく走りました。いちばん小さなご主人さまのよろこぶ顔を思い浮かべ、答えを探してどんどん走りました。しばらくすると、ジンジャーは細い路地の奥で食事のねずみを見つけたので聞きました。

「こんにちは、ねずみさん。どうしたらいちばん小さなご主人さまがよろこぶか知ってる?知ったら教えてよ。僕、一度でいいからお礼がしたいんだ。」

ねずみはひくひくと鼻を動かしながら言いました。

「いちばん小さなご主人さまは何が好きなんだい?それを聞いてみなよ。そして買ってあげればいいのさ。」

だれだって、おいしいものをおなかいっぱい食べたらよろこぶよ。」

ジンジャーはがっかりしました。だってジンジャーは、いちばん小さなご主人さまの好きなものを知っていても、お金なんて持っていなかったから。

ねずみさん教えて？



登る 登る

困ったジンジャーは木に登ってみました。すると、カラスが羽を休めていたのでジンジャーはカラスに向かってたずねました。

「ねえ、カラスさん、どうしたらいちばん小さなお主人さまがよろこぶか知ってる？知ってたら教えてよ。僕、一度でいいからお礼がしたいんだ。」

カラスは大きなくちばしで答えました。

「どうしたらいいかだって？簡単さ。いつもその子の上を飛んで、危険がきたら助けてあげるのさ。そうすればいちばん小さなお主人さまはよろこんでくれるさ！おれならそうするぜ。」ジンジャーは泣きながら木を降りました。だってジンジャーには、カラスのような翼も立派なくちばしもなかったんですもの。

カラスさん教えて？



探して 探して

それでもジンジャーは、いちばん小さなお主人さまのよろこぶ顔を思い浮かべ、答えを探して再び歩きはじめました。

ジンジャーは、首輪をつけて、飼い主と散歩をしている大きな犬を見かけたので聞きました。

「こんにちは。ねえ、どうしたら君のご主人さまはよろこぶの？教えてくれない？僕、一度でいいから自分のいちばん小さなお主人さまにお礼がしたいんだ。」

おしえて？



これならば！



犬は歩きながらしっぽをゆらして言いました。

「風のように走って、飼い主が投げるボールをとってみることだね。そして大きくしっぽをふってとびつくのさ。顔をなめるとすごく楽しそうに笑ってくれるよ。君もやっごらんよ。」

ジンジャーはちょっと考えました。空はとべなくてもこれならできるかもって。

でも、小さなネコが大きなボールを口でくわえるなんてできないし、しっぽはうまくふれません。ザラザラしたジンジャーの舌をいちばん小さなご主人さまは嫌がったこともありました。

もうだめだよ！



「ぼく、ぼく、いちばん小さなお主人さまをよろこばせることができないのかな。」
ジンジャーはお空にむかって大きな声で泣きました。

そのときです！

歩き疲れ、真っ黒によごれ、お腹もすいたジンジャーに向かって暖かい手がのびて来ました。



やさしい手

「ジンジャー！いったいどこへ行ってたのさ。ぼく心配して街中探したよ！」
いちばん小さなご主人さまでした。いちばん小さなご主人さまは、汚れてつかれきったジンジャーを連れて帰り、やさしく やさしくなでてこう言いました。

「さあ、元気になったらいつものようにのどを鳴らしておくれよ。ぼくそれがすきなんだからさ。」

なんてことでしょう！この言葉を聞いたジンジャーは目を輝かせて喜びました。だって、ほかの動物のようににはできないけれど、のどを鳴らすことは誰よりも得意なんですから！

幸せのありか

いちばん小さなご主人さまのおかげで、ジンジャーはすっかり元気になりました。
ミルクを飲んで昼寝をして。いちばん小さなご主人さまのためにジンジャーは毎日毎日幸せそう
にのどを鳴らして暮らしましたとき。



おしまい



おわり